

八幡 in GGO

ヴァルプルギス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

八幡をGGOにぶち込んだだけ。

※修学旅行で仲直りせず、そのまま卒業したIFの世界線の八幡のお話。

目次

第二話 第一話

12 1

## 第一話

五月上旬。寒い寒い冬があけ、ようやく暖かくなってくるかという季節だ。たまにアホみたいになつたり、また冬に逆戻りしてみたりと、あつちこつちな時期でもある。

——まるで、今の俺みたいだな。

ふと、カツコつけて自嘲してみる。けどまあ、そんなことをしたところで現状に何が変わるわけでもないのだが。

あの総武高校を卒業し、大学に進学したはいいものの、ただなんとなく日々を過ごすだけの怠惰な生活を送っている俺である。

大学は、俺は地元ではなく東京の大学に進学することにした。マイリトルエンジェル小町のいる実家を離れるのはかなり、かなり嫌だったのだが、今回はなんとも珍しくあの地元にいたくないと思うのほうに勝つたのだ。ちなみに、俺が実家を出て一人暮らしをするといったときには小町以外誰も俺を引き止めてくれなかった。凹む。

親父なんかは邪魔者である俺がいなくなることがよほど嬉しかったのか、俺が発券するまでたいそう機嫌が良かった。厄介払いできてせいせいすると言わんばかりの雰囲気だった。ていうか実際に言っていたな。絶対に許さない。

とまあそんなわけで、一人寂しく上京し、結構ボロいアパートの一室を借りてちよこちよこバイトと実家からの雀の涙程度の仕送りかどうかこうにかやっている。ていうか実家でても俺の扱いが雑ってどうよ。お父さんお母さん、もつと息子を慈しむ心を持って。いやまあ別に期待してないけども。

最寄り駅で電車を降り、一人でいつもどおりの帰路につく。大学では何か変わるかとも思い、ちよつと奮発して結構立派な手帳とか買ってみたはいいものの、よくよく考えれば見知らぬ土地に見知らぬ人達。そしてぼつちスキルをカンストしていた俺が新天地でうまくやっついていけるはずもなく、予定帳はどこまでも白紙のまま、俺の引き出しの中でずつと眠っている。多分もう日の目を見ることはない

じゃないかな、うん。

むしろ高校二年からの二年間が異常であったのだ。それを何を勘違いしたのか、大学でも…と思っていた自分が今になってみるとすごく滑稽で笑えてくる。

はあ。最近、常にひとりでいることが当たり前になってきたせいとか、自虐的な思考が増えてきている気がしてならない。

アパートの自室の扉の前に来て、カギを取り出しながら、俺は思考を振り払う。これからせつかくの気の休まる時間に、つまらない自虐で台無しにするなんてそれこそつまらない。楽しみは楽しんでこそだ。

上着を脱いでハンガーにかけ、俺は机からあるものを取り出す。アミュスファイア。ナーヴギアの次世代機であるこれには、俺は大変お世話になっている。というか唯一の俺の今の趣味と言ってもいい。

あの世紀の大事件があった後、VR業界は一時期もはや終わりかと囁かれていたものだが、なんともたくましいものである。俺も最初は警戒していたのだが、とうとう誘惑に耐えきれずに購入し、今に至るまですっかり愛用してしまっている。それだけ今のVR技術の進歩は目覚ましい。本当に現実世界と見分けがつかないのだ。

これを一番最初に体験できたSAOプレイヤーはうらやま…うん、ゴメン。嘘ついた。やっぱ羨ましくねえわ。デスゲームとか俺には無理です。

アミュスファイアを装着し、ベッドに楽な姿勢で寝転がる。ここんところ、たまにわからなくなる時がある。はたして今の俺は、現実世界と仮想世界、どつちに生きているのだろうか。ふと、そんなことを考えながら、俺は仮想世界へと飛び込んだ。

「リンク、スタート」

あの有名なSAO事件の後、ザ・シードなるものが世界中にばらまかれ、そのお陰で息も絶え絶えだったVR業界はすこしずつ、だが確実に息を吹き返していった。ザ・シードは簡単に言うとなんか簡単には仮想世界を作ることができない。パックみたいなもんだ。誰が最初には

ら撒いたのかは不明だが、その誰かさんのお陰で今や世界中で新たな仮想世界が続々と誕生している。俺から言わせればそんなもんを作れるのは一人しかいないと思うが、今のところ問題はないようなのでとりあえずはいいかという感じである。一介の大学生がどうこうするような問題じゃないしね。いやまあVR関連の犯罪は結構後を断たないけど、そんなことはなんにでも言えることなのでしようがないといえましょうがないのだ。使うのが人間なのだから、これはもうね、うん。

そんな数あるVRMMOの中で、今俺がプレイしているのはガンゲイルオンライン、通称GGOと呼ばれるものだ。多くの他のVRMMOがファンタジーな世界観なのに対し、このゲームは唯一の世紀末的な世界観なのだ。ちなみにモヒカンはいない。いやいるかもしれないけど、俺はまだお目にかかったことはない。

設定としては、最終戦争から出戻った人類が、荒廃した未来の地球で光学銃やら過去の遺物である実銃やらで機械兵器や生体兵器とドクパチやらかす、などといった感じだ。もつと公式ホームページなんかやWikiなんかで調べれば詳しく載っているんだろうが、そこまでは興味がわかなかったので調べていない。ようは楽しめればいいのだ。

このGGOに出会う前は、いろんな他のVRMMOを転々としてきたのだが、これを見つけて以来珍しく俺がはまり込んでいる作品でもある。剣と魔法のファンタジーだって嫌いじゃない。だが、それよりもこの世界観がなぜだかすごく好みなのだ。リア充とか見ると心の一気に世紀末になるからね。俺の心象風景とそっくりなのかもしれない。あのアーチャーよりも今の俺の心は荒野になっているに違いない。

取り合えずいつもどおりにログインした俺は、普段俺が使っている廃ビルの一つに潜り込んだ。ちなみに潜り込んだというのは比喻で、地下に物理的に潜り込んだわけではない。以前は高層ビルとして立派な外観を誇っていたであろう建物は完全に朽ち果てていて、まさに廃墟という言葉が相応しすぎるほどだ。いつも思うのだが、これ何か

の拍子に倒れたりしないよね？ 大丈夫だよな？

一番高い位置で、なおかつ広範囲を見渡せる場所に陣取り、ウインドウを操作して愛銃をオブジェクト化させる。SVLK-14Sだ。

これは実銃で、手に入れてから調べてみたところ、ロシアがその技術の粋を集めて制作した高性能スナイパーライフルである、とのこと。世界でも類を見ないほど超長距離射撃を可能にするほど射程が長いのだそう。主に射程に重きをおいて開発された銃らしく、なんと4km先の目標まで届くそう。ヤバイ。

その代わりといつてはなんだが、超長距離の目標を狙撃しようと思えばどうしても撃つてから着弾までの時間は長くなるし、風なんかの天候にも左右されやすい。GGOにはちゃんとそういうシステムも搭載されており、やりにくいといえればやりにくいのだが、そこがいいと言うプレイヤーも多い。まあ俺もその一人だが。

まあごついし重いし持ち運びには不向きだが、俺はこれを手に入れてからずっと愛用し続けている。最初は狙撃なんてまだるっこしいと思っていたものの、やってみると意外とこれが面白い。

相手の攻撃が届かない安全圏から一方的に攻撃できるというのは最高のアドバンテージだ。ビビりな俺にもびったりな戦術と言える。う。

銃を横に置いてスコープだけ取り外し、望遠鏡代わりに覗き込んで周囲を見渡し、敵を探す。大体ハズレの時はこうしてただ見渡しているだけなのだが、たまに遺跡へ向かう連中やPvP専門のスコードロクンなんかを見つけるとときもある。そういうわかりやすい成果があるときはいいのだが、ない時も結構多い。まあでも待ち伏せなんて相手が来るまでひたすら待ち続ける受け身の戦術なので、仕方ないのだけども。

そんなこんなでかれこれ一時間。そろそろ違うポイントに移動しようか迷っていると、とうとう動きがあった。二時の方向にプレイヤーが合計九人。スコープを調節してアップで見ると、どうやら一人を八人で襲っているようだ。よく見たらその一人は大した装備すらしていない。うん、ていうかあれ<sup>ニュービー</sup>初心者だな。初期装備だし、あ

れ。対して他の八人はきちんとした装備で、なおかつ集団戦にも慣れている動きをしていた。恐らくだが初心者狩り専門のスコードロンか何かだろう。こういうゲームには必ずと言っていいほどいるような連中だ。

こういうのがいるから新しいゲームに新規参入するのをためらう人達が出てくるのだ。特にこういうMMOにはよくある話で、誰だつてまだ右も左もわからないときに集中してキルされ続ければ嫌にもなってしまう。ていうか俺だって嫌だ。一回されただけで心折れる自信がある。普通にマナー違反も甚だしいのだが、特に罰則が決められているわけでもないのでそれをやるやつは必ずいる。マナーなんて曖昧な縛りはそいつの胸先三寸でどうとでもなってしまうのだから。

「ちつ…胸糞わりいな」

スコープをライフルに取り付け、伏せ撃ちの状態で構える。体を床に投げ出し、楽な姿勢でなおかつ射撃精度も安定する姿勢だ。

欠点は近づかれたときにかんたんにやられてしまう姿勢なのだが、遠距離戦においてはその心配はない。

このGGOにおいて、スナイパーの最も大きな利点は「相手に位置を把握されていない初弾」にのみ、射撃予測線バレットラインが表示されないことだ。至近距離での撃ち合いならばこれが見えていたとしても見えるのと着弾するのがほぼ同時なためあまり意味はないが、これぐらいの距離だと予測線が見えていれば回避するのは容易である。なにせ距離があり、なおかつくる場所がわかっていれば子供でも避けられようというものだ。こういう理由であまりGGOで狙撃手がいない、というわけだ。

だけど俺はこうも思うわけだ。だったら初撃で仕留めりやいいじゃない、と。

んな簡単にいくわけ無いと思うだろ？ だがそうでもない。何事も慣れである。もちろん最初の内は俺も外しまくり、位置を特定されて追いつかれて殺されたり命からがら逃げ出すなんてことは日常茶



飯事だったのだが、ようやくコツを掴んだのか、ある日を境にめきめきと命中精度が上がっていったのだ。今ではこの状態から外すことなんて殆どない。

まあたまに調子に乗ってトッププレイヤーに喧嘩を売り、外して逆襲をくらったりもしているが。特に闇風さんはやばかった。あの時やり過ぎせたのはかなり幸運だった。あのプレイヤースキルは圧巻というほかない。それ以来俺は闇風にさんをつけて呼ぶようになった。後にも先にもさん付けで呼ぶのはあの人くらいだろう。やばい人だぜ、闇風さん。プレイヤーネームは中二っぽいけど。読み方がダークウインドとかじゃなくて本当に良かった。

バイポッドを立て、スコープを覗いて狙いを定める。とりあえずはスコードロンのリーダーっぽいやつから狙うのがいいだろ。八人中でより後方で、他の連中に指示をしている一人の後頭部に照準を合わせる。

風向きや風速なんかも計算に入れての位置取りである。方に一つの間違ひもない。

引き金トリガーに指をそつと添えると、俺の視界に収縮する半透明のライトグリーンバレットサークルの円が表示される。攻撃側に適用されるシステムアシストで、撃った弾丸はこの円のどこかにランダムで当たることになる。

この射撃予測円は自分の脈拍によって拡大、縮小するため、命中精度を上げるには自分のそれをうまくコントロールする必要がある。要はドキドキしていたら当たらないよって事。

ゆっくりと深呼吸し、頭の中のあらゆる雑念を排除する。ぼっちは基本的には単独行動を好むので、周りの騒音や雑音をシャットアウトして自分の世界に入るのは得意分野と言ってもいい。むしろそれしかやることがないとも言える。

今日はいつもの調子がいいのか、スコープの中の標的の細かい仕草や状態まで手に取るようにわかる。周囲の色は一面灰色となり、ゾーン状態に入った。

「……ハッ!!」

射撃予測円が限界まで縮小すると、俺が引き金に掛けた指を引き

絞るのはほぼ同時だった。体全体に後ろ方向への強い衝撃が走るとともに、銃口から眩い発射炎が溢れた。

放たれた弾丸は吸い込まれるようにリーダーの後頭部にクリーンヒットし、HPを一撃で全損させる。強烈な一撃は、頭部だけにとどまらず上半身をほぼまるごと吹き飛ばした。後ろからなので顔は見えないが、おそらくは驚愕の表情を浮かべていたであろう。

事実、リーダーが一瞬にしてポリゴンとなって爆散したのを見た他のメンバーも何が起こったのかわからないと言った顔をして皆一様に固まっている。

狩る側であったはずなのに、一瞬にして狩られる側にまわってしまったのだ。無理もない。だが俺から言わせるなら、揃いも揃って隙だらけもいいところだ。格下の獲物を甚振るのにかまけて、周囲への警戒を疎かにするからこうなる。自分が追う側していると、ついつい気の緩みによって大なり小なり隙というものは生まれてしまうものだ。まあこれは俺が言ったというか、普通に言われている事なんですけどね。

ボルトを引いて薬莢を排出し、次の弾丸を薬室に送り込むと、素早く次の標的に目を向ける。ここから先は時間との勝負だ。奴らがこちらの位置を把握してしまえば、その時点で射撃予測線が出て狙撃が一気に困難になる。

普通はそうならないためにチームを組むのだが、現実世界と同じく仮想世界でもほぼぼっちな俺はそれができない。ていうか、スパイ映画じゃあるまいし、スナイパー一人だけでできることなんて限られてくる。一応対策はしているが、やはりちゃんとした前衛がいてくれたらなとも思う。あいつら、GGOに來ねえかなあ…。

くだらないことを考えつつも、ちゃんと狙いは正確なので、次々とヘッドショットを決めていく。普段はこんなうまく行かないのだが、今日はどうやら絶好調のようだ。

「あ、やべ」

と、思った途端にこれだ。五人目が終わり、六人目というところで当たるはずだった一撃を綺麗に避けられてしまった。どうやら居場

所を特定されてしまったらしい。こうなるともう狙撃は不可能だ。

たがまあ、こんなところで初心者狩りなんてやっている連中だ。

リスクを避け、追撃に注意しながらも逃げ帰るだろう。特に貴重な装備を持っていた場合、運が悪いとドロップ品として失ってしまうこともありうる。逆に標的であった初心者がいい装備何かの持ち合わせがあるはずもなく、このまま襲つてもメリットが少なすぎる。十中八九逃げる、はず。たぶんね。

俺としても弾がもつたいないし、残り二人くらいはいいかと思つていたのだが、次の瞬間、驚きで目を見開くことになった。なんと襲われていた初心者と思しきプレイヤーが、背後から二人に奇襲を仕掛けたのだ。

防具をつけていない背後から、しかも至近距離でハンドガンを乱射した。ちゃんと狙いを付けてもいない発砲だったが、ほぼゼロ距離で撃たれたため、一人はほぼすべての弾丸を喰らい、あつという間にHPを全損させられて死亡した。初期装備のハンドガンは実銃だが威力に難があり、皆他の装備を手に入れると途端に使われなくなるのだが、あの距離ならば問題なく倒せたのだろう。

その証拠に二人目は振り返ったものの撃たれた反動で仰け反り、明らかに体が泳いでいた。その隙に押し倒されて抵抗を封じられ、顔面を何発も撃たれて息絶えていた。

……………うん、ぶつちやけ怖いです。え、何あれやばくない？マジで初心者なのあれ？実は初心者を装った初心者狩り狩りだったりしない？ガッツありすぎでしょ。

いや、流石にそれはないか。事実さつきまでやられっぱなしだったし。自惚れるわけじゃないが、多分俺が助太刀に入らなかつたらやられてたと思う。ていうか初心者狩り狩りってなんだ。自分で自分のネーミングセンスに勝手に絶望していると、スコープ越しにその初心者プレイヤーと目がバツチりあつた。

とつさにスコープから目を離し、視線を外す。いやいや、流石にスコープなしでこちらが見えるわけもない、普通に気の所為だろう。うん、気の所為気の所為。よつし、じゃあもうここは引き払って、別の

ポイントに移動しようか。そうしようそうしよう。善は急げついでうし、急がないといけないね！

ライフルをストレージに収納し、さっさとその場を後にしようとは移動を開始する。ちよつと高いくらいならばショートカットのために飛び降りてもいいのだが、あんまり高いところから飛ぶと落下ダメージがあるためいちいち自分の脚で降りなければならぬところが面倒なところだ。

周囲を軽く警戒しながら、廃ビルを出てさつきとは反対の方向へ行くとしたとき、不意に一発の銃声が轟いた。

そこから先は考えるよりも早く体が動いた。さつき周囲を確認したときに敵影は皆無だった。ならばまさか狙撃、いや銃声が聞こえたので至近距離から、などとぐるぐるする思考で左手でサイドアームの1911ガバメントをぬき、もしものために右手を腰に回したまま振り向くと、そこには予想だにしない襲撃者がいた。

いや、よく考えなくてもわかるはずの話だった。周囲に見た限り敵はいない、ならばいるのは俺とさつき襲われていた初心者プレイヤーだけだ。なんとなく嫌な予感がして急いで降りてきたが、どうやらそれがかえってアダとなつたらしい。

俺としたことが、失敗だった。初心者だからといって無意識に脅威ではないと判断したのは軽率にも程があつた。思い込みは時に信じられない結果をもたらすこともある。

だがしかし、同時に今からでも十分に巻き返せるのもまた事実ではあつた。たしかに先程は不覚を取つたが、そもそもあんな貧弱な装備では俺は殺せない。いや、時間をかければできるだろうが、それは俺が抵抗も何もせずにはげつと突つ立っていたときだけだ。

防具だつてそれなりのものを揃えているし、スナイパーだからと言つて近接線が不得手だとは限らない。

「あの、待つて待つて！ その、別にあなたとやり合おうとかじゃ無くて！」

「はあ？ 何言つてる。そもそも撃つてきたのはそつちだろ？ 俺はあんな初心者狩りみたいなことはしないが、手を出されたなら話は別

だ。大体、発砲しといてその言い分が通るとでも？」

「っ……、あ、当てるつもりは最初からなかったわよ！でも仕方ないじゃない……あなた、普通に呼び止めようとしても逃げてたでしょう」「む……それは……」

うん、たしかに。相手は初心者、しかも女性プレイヤーとあっては、残念な？がら面倒ごとの匂いしかない。ゲーマーたちのやつかみとは時に死ぬほど面倒な事態を引き起こすことだってある。ここまですり引なことをされなければ俺は即座に立ち去っていたことだろう。ていうかなんでわかったの君。

「さっきは本当にごめんささい……助けてもらったのにその恩をあだで返すみたいなことして。そして助けてくれてありがとう。でも恥を承知でお願いします、私を街まで連れて行ってくれませんか……？」

「……」

参った。これは本当に参った。これではどう転んでも俺はこの娘を街まで連れていくしかないではないか。

いや、普通に見捨てても何ら問題はないのだが、それだとこの初心者はまた同じような連中に襲われるのがオチだろう。

初心者狩りではなくても、中には女性プレイヤーを好んで襲うと言った変態としか思えない行動をするプレイヤーも存在している。

そしてこいつはただでさえ珍しい女性プレイヤーで、しかもなかなかに整った容姿である。ぶっちゃけて言えばまあ美少女である。VRMMOのようなフルダイブでは現実世界の性別と違う性別のAvatarを使うことはできない。

思想的、肉体的に負荷がかかるためだ。そのため、従来のMMOのようなネカマネナベなどは一切ない。まあ中にはM9000系のよくないいわゆる男の娘なAvatarもあるらしいが、それもかなり珍しい。

現実世界ではどうかはともかく、今のこいつは鴨がネギ背負って更に追加で高級霜降り肉をぶら下げているに等しい。

それがわかっていながら放置するって、どんだけ鬼畜なの？　という話になってしまう。そして俺は鬼畜ではない。

しかも曲がりなりにも一度助けたのに、今度は知らないなどは流石に無責任すぎるというものだ。中途半端にやるぐらいだったらむしろ最初から関わりを持たないのが正解なのだ。何事も中途半端はろくなことにならない。

そう。つまりこれは俺の精神安定的な面でそうするしかないというだけで、決して不安げな美少女の上目遣いにくらっときたからではない。ないっつたらない！

「お前、それ俺がお前を後ろから撃つとか考えないの？ 頭大丈夫なのか？」

「あなたはそんなことしないとidthったから…だって、本当にそういう人だったらあの時私も撃たれていたはず」

一応、最後の抵抗とばかりのこの言葉も、あえなく撃墜されてしまった。ヤダこの娘、だいぶ強くない？主にハートが。

「はあ…わかったわかった。一応乗りかかった船だ。今日のことGGOを嫌いになられても嫌だし。レビューとかで悪評ばらまかれても困るからな。一GGOプレイヤーとして。一GGOプレイヤーとしてだかな？」

そう、勘違いされては困るのでよく言うしておく。俺は別に君が美少女だから助けたとかそんなんじゃないからね？勘違いしないでね？というニュアンスを込めて。

届け、この思い！

「…………ふふっ。ええ、そうね。ありがとう」

え、何このかわいい、みたいな笑い方。やめてくんない？ 違うからね、別にツンデレとかじゃないんだからね？ とわめきたいのをこらえて、俺は背中を向けると歩き出した。

諦めたとも言うね。後ろからついてくる足音を聞きながら、俺はゴーグルをかけていたことに心底感謝していた。キョドっていたのがバレなくてよかった。マジで。

## 第二話

GGOは、見ての通り多くの銃火器が実装されている。もちろん世界観に違わず光学銃みたいなSFチックな見た目の銃もあるが、やはり現実の銃も数多くあることが人気の一つとなっている。ガンマニアやミリタリーオタクたちにとってここは天国のような場所であろう。まあ当然のごとく、PVPが推奨されているわけで、フィールドでプレイヤー同士が出会ったら即撃ち合いが始まるとまで言われている。

そういう意味ではさっきのこいつの行動はそれこそやっちゃだめな典型的な行動と言えるが：初心者なので仕方ないのだろう。知らないものは仕方ない。

「んで、お前：結局なんであんなとこいたんだ？ 普通初心者が最初に転移するところは街ん中なはずだろ？」

「ねえ、そのお前っていうのやめてくれる？ 私の名前はシ、ノ、ン。ちゃんと自己紹介し合ったじゃない」

「あ、はい。すみません」

さつき移動しながら軽く自己紹介しあい、堅苦しい敬語はいらないと言ったらとたんにこれである。まあ見た目からして猫みたいな釣り目で明らかに気が強そうである。どうやら俺は気の強い女性ととことん縁があるようだ。ちなみに俺のプレイヤーネームはエイトと登録している。俺にそのへんの洒落た名前を期待しないで欲しい。ようはりアルネームじゃなきゃいいのだ。

ていうか怖いよ。こつちが敬語になっちゃったじゃん。

「もともと、新：友人に勧められてこのゲームを始めたのよ。私は：どうしても、ここでやらなくちゃいけない事があるの」

……。なんだろう、この空気は。俺としてはほんの軽い雑談程度の気持ちで振ってみたのに、なんかものすんごく重そうな答えが帰って来た。軽くキャッチボールするつもりだったのに、返ってきたのがボールではなくグレネードだった。いやなんでさ。

ええー。何、どうすんの。これ。知らず知らずのうちに地雷原に足

踏み入れちゃったよ。地雷掘り起こされる側だったのにいつの間にか地雷掘り起こす側になっちゃったよ。これは返答次第ではものすんごく角が立つ気がする…。必要以上に親しくする気はサラサラないが、かと言って別に嫌われないわけでもない。地雷を踏まれるのは誰だって嫌なもんだ。ソースは俺な。

と、色々ごちゃごちゃ考えた結果、俺がとった答えは——  
「ん、そっか。…お、ほら、街が見えてきた」

聞かなかったことにした。スルーである。だってしようがないよね、そもそもそんなことに踏み込むような仲でもないし。どうせすぐ別れるしね。

シノンも気を遣われたと思ったのか、それ以来そのことについて言及することはなかった。

気まずい沈黙が場を支配し始めたのもつかの間、目の前に巨大な数多の高層建築物群が現れたことで払拭された。

俺たちが今ついたのはここGGOの首都である「SBCグロツケン」。移民船団の宇宙船の上にそのまま都市を築いた、というもので見た目もかなり近代的である。

俺としては目にだいぶ悪そうなネオンカラーのホログラムがバンバン飛び交うこの都市があまり好きではないのだが、そういうものとして割り切ってしまうばまあ耐えられないこともない。それと首都と銘打っているだけあってGGO最大規模の都市であり、店なんかも個々が一番品揃えが充実しているので重宝している。あのライフルを入手してからは装備が固定化してあまり店には足を運ばなくなつたが、たまに副武装サイドアームを変えようとして訪れることはままある。

「んじゃ、ここでお別れだな。ここみたいな都市はフィールドと違って戦闘禁止区域だから、襲われる心配はまずないから」

「え、あ、えっと…その…」

取り合えず人目につく前にサヨナラバイバイするべく、さっさと立ち去ろうとした俺なのだが、そのいかにも不安げな声にまたもや後ろ髪をぐいぐい引っ張られることとなった。

振り返って見ると、気丈な態度を保とうとしているがどうしても不



安を隠しきれしていない、もじもじしながらチラチラこちらを見てくる美少女初心者プレイヤーが、そこにはいた。ていうか、シノンだった。情報量が多い。

いやお前、さつきまでの強気な姿勢はどうしたんだ。明らかにキララ違うくない?」

あ、声に出てた。俺のバカ。

「さ、さつきまではその…戦闘のあれでテンションがおかしくなつたのよ…。じゃなきや初対面の人にあそこまで言えないわよ、普通…」

ああ、うん。ソウデスネ。遠くからでもあの鬼気迫る戦いぶりは怖気が走ったからね。ドーパミンドバドバ出てたよねきつと。口には出さないけど。撃たれたくないし。

『———エイトにはあれだよ、気遣いが足りないよ! いい、女の子には優しくしなきゃダメなんだからね! よって、これからエイトは極力女の子には優しく接するよーに! 具体的には、ほら、ボクとか。ボ、ク、と、かー!!』

ふと、以前あいつに言われたことを思い出した。今まで女の子に優しくされたことほとんどないんですがそれは…と反論したが黙殺されてしまった。やはり世の中は理不尽である。

しかしなし崩しとは言え、約束は約束である。一方的な宣言は約束とは言わない気がするが、それを言う就多分泣かれるのでやめておいた。あいつが泣くと俺の心も泣くし、それを察知して飛んでくるあいつらにボコられて物理的にも泣くため悪いことづくめなのだ。ま、それはともかく、

「んー、じゃああれだ、装備整えるぐらいならつきあってもいい、けど…」

「……ん、じゃあお願い」

食い気味にお願いされた。

「OK, じゃあ取り敢えず、初心者向けのショップ行くか」

そう、これは頼まれたからに過ぎない。彼女は右も左もわからない状態で他に頼れる人物のアテがなく、たまたま近くの俺が都合が良

かったので頼っただけ。

本当にただそれだけなのだ。キッチンとそう自分に言い聞かせておく。油断するとすぐに顔を出す勘違いの虫を、力づくで押さえ込む。以前だったら、こんなに心の中で動揺したりしないはずなのに。やはりあの部室での出会いから、俺は弱くなってしまうらしい。

たとえば、こうして頼まれるとバツサリ断るのが躊躇われてしまうほどには。そして、そんな俺が、俺は嫌いだったハズなのに。なんでだか、今だけはそんなに嫌じゃないと思えることが、俺にはとても不思議に感じられた。

さて、そんなこんなでシヨップに來たはいいが、ここである問題点に気づいた。そう、俺はまだシノンのこれからのプレイスタイルについて全く聞いていないという事だ。

GGOではレベル制を採用しておらず、「職業」や「クラス」と言ったような決められた型は存在しない。プレイヤーは六つの能力値ステータスの筋力、耐久、敏捷、器用、幸運、感知力を基本とするものと、派生を含めればおおよそ数百種に及ぶ「技能」を自由に上昇させて自分のキャラクターを育成する。

だがその分やり方を間違えると自分のやりたいプレイスタイルに能力構成が食い違ってしまった、なんてことにもなってしまう。そのため、この辺の見極めはかなり慎重に行わなければならない。

と、いう旨を伝えたのだが、シノンの反応は芳しくない。おい、ちゃんと俺の話聞いてたよね？ 一回しか俺言わないよ？

「…エイトは、どういうタイプなの？」

「俺は、どっちかって言うとSTR—AGI型かな。若干AGI寄り。元々このアバターは他のゲームからコンバートさせたやつだから、俺が決めたっていうよりは元々そうだったって言ったほうが正しいな」

シノンはどうやら違うらしく、このGGOが初のゲームだそそうだ。まあ、初めてなんだから悩むよね。なんだかんだいって俺だって最初

の能力値ポイントの割り振りには悩んだし。誰もが通った道だ。

「取り敢えず、何をしたいかでその時の能力値も大体決まってくるから。なんか使いたい装備とか、やってみたいプレイスタイルとかないのか？」

「やってみたいプレイスタイル…。ねえ、エイトみたいな狙撃手<sup>スナイパー</sup>って、GG<sup>こ</sup>O<sup>こ</sup>ではよくいるの？」

「うーん、いや。ぶっちゃけあんまないな。そもそも、このゲームのシステム上、狙撃ってあんまり向いてないんだよな。居場所特定されると避けられちゃうし…。いや、俺が知らんだけかもしれないけど、あんまりおすすめしないぞ。俺は基本的にマジョリテイからははぐれてるからな。現実でも、仮想でも…。うん…。オールウェイズでマイノリティなんだよ、ははっ…」

「自分で言ってるでダメージ受けるのやめなさいよ…。聞いたこっちが悪いみたいじゃない。取り敢えず、あんたには友達がいなくてことはよくわかったわ」

「いやいや、いないことはないからね!?ちゃんというし!…。大体、そういう意味ではシノンだってそうなんじゃねえの? GG<sup>こ</sup>O<sup>こ</sup>、お前みたいな女の子がひとりであるようなゲームじゃねえと思うんだが…。普通だったら友達とかと数人でやったりすんだろ。銃にもあんまり詳しくねえみたいだしよ、そっち系<sup>ミリタリーオタク</sup>の女子ではないんだろ?」

「うっ…。やめましょうか、この話題は。お互いに傷つくだけだわ」  
「……………だな」

互いにダメージを与えあった不毛な会話を打ち切り、ゲームのことに話を戻す。

「んで、結局なにがいいんだ? 決まらなければ、先に装備を決めてそっちに合わせるのも手だぞ」

「私、は……………じゃあ—————」

☆ ☆ ☆

現在俺たちがいるのは遺跡と呼ばれる、まあいわゆるダンジョン

だ。かつては栄えていたであろう巨大都市は、暴走した機械兵器や、  
遺伝子操作で生まれた生体兵器なんか跳梁跋扈する魔窟となつて  
いる。

その一体である機械人形サイボーグのすぐ右を、ライフルの弾丸が腕をかすめ  
ながら通り過ぎていった。

「はい、ハズレ。ちゃんと狙え。ここは外のフィールドと違って風と  
かないから、比較的難易度が低い。射撃予測円バレットサークルが縮まるまでちゃんと  
待て。次はあの柱んとこにいる二体のうちの向かって左のやつな。  
胴体じゃ無く頭をねえ」

「ちよつと！ 私がまだ初心者だつてこと忘れてない？ それに  
射撃予測円コとのタイミング合わせるのしんどいんだけど」

「いいから早く、じゃねえとほら、向こういつちまうぞ？」  
「くくくッ!!あーもう！」

言いたいことを無理矢理のみこんで、シノンは、やけくそといった  
感じで弾丸を放つ。今度は外れず、機械人形ひょうてきの胴体の真ん中に命中し  
た。ちようどあたりどころが良かったのか、一撃で死亡し、キラキラ  
としたポリゴン片を撒き散らしながら爆散した。

「ふふん、どうよー」

やってやりましたが？ みたいなドヤ顔でこつちを見てくる青髪  
の少女。いや、狙ったの頭ですよね？ じゃあダメじゃんと言いたい  
ところだが、とりあえずは良しとおこう。これはゲームなんだ  
し、グチグチ細かいこと言っても始まらないしな。

と、思いながら、俺は数日前の出来事を反芻していた。

「——エイトと同じ、スナイパーをやってみよう」

あのあと、そういったシノンを押し問答し、結局その方向で行くこ  
とにしてその日は解散となった。後になって考えてみれば、シノンの  
やるゲームなのだから俺があれこれ口を出すのははつきり言つて筋  
違いもいいところだったのだが、特にむこうは気にした様子もなかつ

たので、いいのだが。

そして、何故かその日からシノンと一緒にGGOをプレイするようになっていた。どちらから言い出したというわけでもなく、なぜかこう、自然な流れでそうなっていた。わけがわからんって？ 俺にもわからん。

とりあえずは店で安めの中古のライフルを購入し、銃の扱い方などを軽くレクチャーしてから、遺跡に挑むことになって、こうして今現在までに至る。

基本的にはシノンが狙撃手、俺が観測手としてペアで行動し、シノンの射撃スキルを上げている最中だった。

と、迫りくる機械人形をHK-MP5で迎え撃つ。9x19mmパラベラム弾を撃ち込み、一体一体素早く丁寧に処理しながらシノンにたまにアドバイスをしている。

基本的には相手の死角とか、それこそ結構離れた距離から撃っているためほとんどモンスターに襲われることはないが、たまに撃ち損じた敵や背後からの奇襲に備えるためだ。

しかしこうしてみた感じだが、シノンは多分俺と同等か、あるいはそれを上回るくらいに射撃センスにすぐれている。いや、今はまだ言わないけどね？ なんか悔しいし。

そりや今比べたら俺が勝つだろうが、それは普通に俺のほうが経験があるからに過ぎない。多分、このまま順調に行けば、トッププレイヤーと呼ばれる連中に仲間入りするのも夢じゃないと、思う。

まあシノンとしては他にやるべきことがあるみたいなこと言っただし、そういうのはあんまり興味無いのかもしれないが。

さつきとは裏腹に、集中モードに入ったのか、次々と敵モンスターを仕留めていく。タアンタアンとリズムよく響く銃声をどこか心地よく感じながら、最後の一体を仕留めるのまでしつかりと見届けた。「……………お見事」

そう口の中でそつと呟いて、俺はシノンの横顔から目をそらした。真剣にスコープを覗き込むその横顔は触れれば消えてしまいうようなほど、儂く、美しかった。

緊張を解いて息を吐き出すさまを横目で捉えながら、周囲への警戒に戻る。どうやら気付かれてはいなかったらしい。作りものであるはずのアバターに見惚れてたなんて知られるのは、ひどく不愉快で、普通に恥ずかしすぎた。

あと絶対からかわれる。